〈論　文〉

# 中国語語順体系に貫かれた構成原則に関して

## ── 基本語順 SVO を骨子とした肉付けに主眼を置いて ──

平　山　邦　彦

**要　旨**

言語体系の把握において文法の整理は必須事項である。「言語体系の理解の為の文法整理」という場合，大枠を保ちつつも使用者の用途によって幾分調整が必要と考えられる。本稿では，主に「中国語の語順体系を単純な形から複雑な形へと明確な形で体系化を行う」という点を主眼に置き，「日本人学習者に適合する形に加工して」という点を加味して論じた。具体的には，構造的肉付けという部分に焦点を当て，次の内容を示していった。⑴中国語の基本語順が，動作者を主語とした SVO である点。⑵中国語の肉付け関係が主述フレーズを基礎とした各種肉付けの関係にある点。⑶語気助詞は SVO 外部から肉付けを施された形式であり，連用修飾フレーズは VO に対し様々な形で外部からの肉付けの施された形式である点。

**キーワード**：基本語順；SVO；主述フレーズ；主語；肉付け

## 1. はじめに

中国語は形態変化を持たない孤立語であり，語順が特に大きな役割を果たすことは今更強調するまでもない。日本語の文と比較しても，随所に垣間見ることができる。

（1） a．我吃面包。

b．私はパンを食べます

（2） a．他们听音乐。

b．彼らは音楽を聴きます。

上掲の例において，日本語では統語構造において「私」と「パン」,「彼等」と「音楽」の動作者と受動者の意味役割を読み取るには，語順以外にも「-は」「-を」という助詞が手掛かりとなる。一方，中国語には相応の成分が存在しない為相対的に語順にかかる比重が大きいことが見て取れる[(1)]。当然，外国語話者が中国語を的確に把握していく上で語順体系の理解は必須事項である。本稿では「日本人話者にとって有益な中国語語順の整理」という点を加味して議論する。

他言語との比較から中国語の特徴を捉える研究は昨今言語類型論等のアプローチが盛んなこともあり，少なからず確認できる。この点は，語順的枠組みという意味でも例外ではない（陆丙甫 2005；2008a；2008b)。但しこれらの枠組みはあくまで言語的普遍性という大原則のもとに中国語という個別言語を見つめるという大局的観点を主とする。日本語話者の立場から中国語を見つめ整理するという点を主眼に置く場合，必ずしも目的に合致するとは限らない。中国語文法研究で確立された成果や理論体系を日本人に合わせた枠組として加工し提示するのも有用な一面と思われる。

その主要作業の一環として，単純な文から複雑な文への発展関係を明快な記述という部分が挙げられるのではないだろうか。中国語の語順の重要性に関しては，文法書等でも強調されることである。ただし，先に挙げた

---

（1） 但し，他の言語においては語順が重要でないと述べているわけではない。例えば形態変化が豊富な欧米言語においても語順の重要性を主張するものも見られる。陆丙甫、罗彬彬（2018）において欧米言語における統語構造の分析も，語順が優先的な要素として左右し形態変化はあくまで補助的なものと指摘している。

単純な語順から複雑な語順への一本の筋の通った解説を見かけた印象に乏しい[(2)]。その大きな要因として，骨子となる基本語順に対して，如何なるプロセスから発展関係がなされたのか，詳細な分析と整理及び記述のなされていない点が一つの原因のようにも感じられる。もしも同一平面状からのみ記述しようとすれば無理の生じることは推測に難くない。逆にこれからの棲み分けをしっかりと行った上で分析を施せば，より合理的な解釈が可能になることが期待される。その主要なプロセスについて，筆者としては主要な次の３段階が主要素になると考えている。

（プロセス１）　単純な文から複雑な文への構造的な発展関係を如何に説明するか。

（プロセス２）　単純な文から複雑な文への意味的な発展関係を如何に説明するか。

（プロセス3）　一見すると（１）（２）のルールから例外と思われる事象に対する合理的説明を如何に説明する。

紙幅の都合上，本稿では，主に（１）の点に絞り基本語順の設定と発展関係の一部分に焦点を当てて論を進めていく[(3)]。

## 2. 基本語順と肉付け関係

本章では，第１章で提起した観点を受け次の２点を論証の基本点として

---

（２）　3.2 でも指摘しているが，他の主要要因として，中国語文法研究の主眼が欧米の文法観から脱却し中国語独自の文法体系の確立に置かれている点も挙げられる。その観点から出発する場合，本稿で主眼とする SVO を軸とした語順体系という発想自体欧米型の文法体系の踏襲として忌避されやすいことは容易に推測できる。

（３）　疑問文は考察の対象から外す。中国語の疑問文は英語と異なり，平叙文の語順を基礎としているからである〔例．我去学校。（私は学校に行きます）→你去哪儿？（あなたはどこに行きますか）〕。

いく。(１)中国語の基本語順がSVOにある点。(２)中国語の語順はSVOを骨子とした肉付けの関係にある点。

### 2.1　中国語の基本語順SVO

中国語の語順を把握する一つのステップとして，中国語の各種文型の把握が必要不可欠となる。その意味で，范晓（2010，2013，2015，2016）の如く，中国語の各種文型に対する詳細な記述の加えられたことは大きな意味を持つ。各種構文スキーマの定着は，一つの言語を掌握する上で基礎的事項の一つとなる。その上で，上述の各種文型が如何なる必然的な規則で結びついているのかを理解することが次の重要なステップとなる。理論的な整理と説明が加えられれば，中国語語順体系全体像の解明に寄与することとなる。

中国語の基本語順についてはSVOであるのかSOVであるのか全ての研究における観点が一致しているわけではない。しかし，概ねSVOという共通認識が形成されている（张谊生2013)。実際SOV語順がSVO語順と比べて，使用頻度が劣ることや使用における制約の存在すること（沈家煊1999：196-219；储泽详、王艳2016；施春宏2004：17-18)，「動作者＋受動者＋VP」と並ぶSOV語順自体が特殊性を有する（陈平1994：166-167；方梅1995：284)，等SOVの有標性に関しては先行研究でも指摘されている。更には基本語順をSVOと断言していないながらも，その論旨から中国語の語順はSVO（或いはSOVは有標的語順）という前提から議論が成り立っていると考えられる先行研究も多々見ることができる。一例として主述述語文を挙げておきたい。次のようなSOVタイプは成立に種々の制約が見られる（陆丙甫2011：293；陆俭明2016：9-10，2017：61-62。例(３)(４)(５)は陆俭明2016，2017より引用)。

（3）

a．姐姐衣服洗干净了。（姉は服をきれいに洗いました[4]）

b．* 姐姐弟弟的衣服都洗干净了。

（4）

a．姐姐把弟弟的衣服都洗干净了。（姉は弟の服をみんなきれいに洗いました）

b．姐姐棉布的衣服洗干净了。（姉は綿の服をきれいに洗いました）

c．* 姐姐棉布的、不像话的衣服洗干净了。

d．姐姐把棉布的、不像话的衣服洗干净了。（姉は綿の，話にならないくらい汚れている服をきれいに洗いました）

（5）

a．* 姐姐全是油腻脏得不像话的衣服洗干净了。

b．姐姐把全是油腻脏得不像话的衣服洗干净了。（姉は全身油まみれで話にならないくらい汚れている服をきれいに洗いました）

上に挙げた（3）（4）（5）は何れもOに受動者の用いられた主述述語文である。“把”構文と対比した場合，文の成立には種々の制約が課せられる。陆俭明（2016、2017）によると，例えば（3）の如くSとOの間に領属関係が成り立たない場合不成立となる。また音節数が長くなる場合も，（4）（5）の如く文の成立が危ぶまれる（陆丙甫 2011：293；陆俭明 2016：9-10，2017：61-62）。何れも“把”構文にするなり加工が必要となる。
また仮に“把”構文をSOV語順の形式と見なしたとしても，その有標性は拭うことはできない。周知の如く，“把”の後の物は通常特定物が用い

（4）　本稿の日本語訳について，筆者によるものは（　）で示している。引用文献のものは〔　〕で記している。

られ不特定なものは用いられない（把这件衣服洗干净了／＊把一件衣服洗干净了），Oに後続する動詞フレーズには裸の動詞が用いられない（把衣服洗干净／＊把衣服洗）という内容は，教学の場でも度々解説される。更には，その伝達意図の特殊性についても先行研究の関心を浴びてきた構文でもある[(5)]。また形態変化のない中国語においてはSとOがVによって左右両側に隔てられている語順であるSVOの方が，情報伝達において利する部分が多いものとなる[(6)]。

以下，本稿でもSVO語順を骨子とする立場をとっていく。

### 2.2　SVOに対する肉付けの関係

第1章で，提示した複雑な文への発展関係のプロセスを本稿では「基本語順SVOを基礎とした肉付けの関係」と考える。更に「肉付け」という

---

（5）　中にはSVOの形式では使用できず“把”構文のみで使用可能な形式も存在する〔例．我把护照和旅行支票放在保险箱里了〔私はパスポートとトラベラーズチェックをセイフティボックスに入れておきました〕（守屋 1995：296）。この種は，状況はSVOから派生後の構文に細分化的調整［elaboration］が施され，基本形式への復元が不能となったタイプと考えられる（袁毓林 1996：253）。

（6）　SOV形式を比較的自由に使用できる構文の代表例として，様態補語表現“S（V）OV得C”（例．他汉语说得很好（彼は中国語［を話すの］が上手です））が挙げられる。但し，この場合“V得”におけるVは動作の意味が消失している。“V得”の後続成分における伝達の中心は状態を表す語句（上の例では“很好”）にある。“V得”の役割に関して，（杉村 2007a：170-171）においてVの発生を前提情報とした“承指形式”（照応形式）という指摘が見られる。そして，日本語に訳出する際，“V得”を訳出しない方が自然な状況が多く存在することも指摘されている。

　你哥哥拉了贝多芬的奏鸣曲，他拉得真好！（あなたの兄はベートーヴェンのソナタを演奏し，本当に上手でした）

　上の文で“拉得”は“拉了”という動作の発生を受けた照応形式となる。この点からも，Vの動作性の顕現度の低いことが伺える。

部分について「SVO という骨組みに対し他の要素を付加することで種々のリンク関係を構成すること」と定義したい。「肉付け」という場合，各種構文において顕現される SVO の作用力は異なりを見せる。

（6）

a．*他们*在图书馆学习汉语。（*彼らは* **図書館で**中国語**を勉強します**）《平山 2012》⟶*他们*学习汉语。

b．*他们*在图书馆~~学习~~汉语。

（7）

a．*我*向上级详详细细地汇报了情况。（*私は*上司に**事細かに**状況**を報告しました**）《平山 2017b》⟶~~我汇报~~情况。

b．**我*向上级详详细细地~~汇报~~子情况。

上掲の文は連用修飾の例である。何れも VO の前の連用修飾語を削除しても構造的骨子として SVO の存在が見出せる。この点は動詞“学习”“汇报”を削除すると文の成立しなくなることからもうかがい知ることができる。また意味的にも，“学习汉语”，“汇报情况”という命題を中心に成り立っている。

一方で，次の例では文の意味的骨子として SVO が見出しにくい。

（8）

a．*她*不吃面包。（*彼女はパン*を食べ**ません**）《平山 2012》

b．**她*不~~吃~~面包。

c．—//→*她*吃面包。

上掲の例は“不”を用いた否定文である。“吃”を削除した場合文自体の成立は危ぶまれる。この点構造的に述語動詞の重要性を垣間見ることができる。一方“吃”は意味上の骨子とはならない。否定の前提となる「予め設定された相対する肯定命題」となる（沈家煊 1999：57；杉村 2005）。

更に，以下の文では構造的にも意味的にも SVO の残像すら見出しにくい。

（9）

a．*我*听懂了你的意思。〔私は君のいう意味が聞いて分かった〕《輿水・島田 2009：25》

b．＊*我*听懂了你的意思。／ *我*听懂了你的意思。

c．—//→＊*我*听你的意思。／*我*听你的话。

上掲の例における SVO と肉付けされた成分を見てみたい。こちらは，構造的にも意味的にも V に当たる“听”の存在よりも補語“懂”の方が重要性を増す。この点は(9a)(9b)(9c)を対比しても分かる。論理関係から見て，“我（听）懂了你的意思”という結果状態に至るには“我听你的话”という動作の存在が必要となる。但し，この点はかなり背景化された形となっている。

以上，中国語の各種構文では骨子とする SVO の残像が鮮明なものから形骸化したものまで存在する。それぞれ次元を異にした肉付け関係を辿る形となる。

## 3. 中国語の語順的枠組み

本章では，骨子としての核心語順とその肉付け（構造的肉付け）の関係を論じるにおいて，骨子となる SVO についてより焦点を当てて論じる。

### 3.1 賓語の基本的枠組

日本人学習者は大多数が英語を第一言語として学んだ背景を持つ。よって，中国語 VO の意味関係が母語と英語 VO の関係から理解し易いならば，容易に受け入れやすいことが推測される。この部分は冒頭の（プロセス 1）で挙げた処理で十分足りることが予想される。一方で言語背景による理解から乖離した場合有標的なタイプとして，（プロセス 2）（プロセス 3）での処理が妥当と考えられる。この点の議論は平山（2008，2017c）に

譲るとするが，本稿では大枠の部分のみを提示する。

中国語の VO 関係については，日本語より幅広い関係性を見ることができる。賓語の意味役割は文法書や辞書の中でも解説される項目となる（北京大学中文系现代汉语教研室编 2004：318；刘月华等 2001：460-462；孟琮等 1999；朱德熙 1982：110；輿水・島田 2009：26,70-72）。日本人話者の語感からして連想し辛いタイプを以下に列挙しておく。

(10)　吃大碗（どんぶりで食べる）／洗凉水（冷水で洗う）⇒賓語が道具

(11)　起风（風が吹く）／下雨（雨が降る）⇒賓語が動作者

(12)　墙上挂着一张宣传画。（壁に 1 枚のポスターが張ってあります）⇒賓語が動作者

(13)　睡觉（眠る）／洗澡（入浴する）／登记（登録する）⇒賓語が同源タイプ

(10)の賓語は道具を表す。日本人の語感からすれば賓語となる成分は連用修飾語としての印象が与えられるだろう。(11)の VO 関係は自然現象を表すタイプとなる。文法書等では“下雨了！”（雨が降ってきた）等の無主語文という説明を見ることもできる。(12)は存在文の例である。「場所＋V 着＋動作者」という文型のもと，動作者が賓語の位置に置かれる。(13)は V と O の両者が，それぞれ「眠る」「洗う」「記録する」という同義語・類義語が用いられている。離合詞の例として見なされる例である。個々の形態素を見ると，意味的には並列構造としての色彩を呈する。動賓構造の体裁を保つのはその統語構造の機能によるものである（例.“睡一觉”“洗个澡”“登过记”）。

中国語の VO についてかくの如き特徴が見られる。その一方日本語訳に当てはめてみると，対応形式には大まかな傾向性を見ることができる(7)。

---

（7）　ここで挙げる〔1〕から〔6〕は，VO を日本語に訳す場合，O の後ろにいかな

〔1〕 SはOをVする

(14) *我**喝**冰咖啡。(私はアイスコーヒー**を飲む**)*《平山 2012》

(15) *她**写**信。(彼女は手紙**を書く**)*

(16) *他**知道**这件事。(彼はこの事**を知っています**)*《商務印書館　小学館共編 2016：2024》

中国語の VO を日本語に訳出する際，多くの場面でこの意味関係が対応する。換言すれば，賓語の意味役割を幅広く網羅する。上掲の例において(14)の“咖啡”は受動者，(15)の“信”は結果，(16)の“这件事”は心理動作の対象を示す。

また，本節の冒頭で例(11)(12)を挙げて VO の意味関係に「O が V する」というパターンの存在することを言及した。当該パターンの中にも「O を V する」という関係性から類推が可能となるものが見られる。

(17) *那儿**有**一家快餐店。(あそこに一軒のファストフード店**があります**)*《平山 2012》

(18) *教室里**有**一个人。(教室には人**が**一人**います**)*《平山 2012》

上掲の存在表現は“S［場所］+‘有’+ O［人 / 物］(S［ある場所］に O［人 / モノ］がある・いる)”という形で用いられる。この点は，“有”の持つもう一つの用法である所有義（“S 有 O”という形で「S は O を持っている」）とのリンクから捉えることができる。

(19) *我**有**电脑。(私はパソコン**を持っている**／私にはパソコン**がある**)*《平山 2017a》

(20) *我**有**三十本小说。(私は小説**を** 30 冊**持っている**／私には小説**が** 30 冊**ある**)*《平山 2012》

存在と所有についてリンク関係から見ると，存在表現における主語（場

---

る助詞（「を」「に」「が」等）が用いられるか（という形式の面）でグルーピングしている。グループ内の意味役割が同一と述べているわけではない。詳細は，本文中の解説を参照。

所）は広義の所有者と見なすことができる。また賓語で表される存在する人や物は広義の被所有者と見なすことができる。存在と所有のリンク関係については，上掲の例(19)(20)に示す如く，所有を表す“有”構文の“有O”の部分が「Oがある」と訳出できる点でも見出すことができる。

〔2〕 SはOにVする

(21)　*她*去图书馆。（*彼女は*図書館**に行く**）《平山 2012》

(22)　*姐姐*来东京。（*姉が*東京**に来る**）

(23)　*银行*在邮局旁边。（*銀行は*郵便局の隣**にあります**）《平山 2012》

(24)　*我*给你。（*私は*あなた**にあげます**）

上掲の例から説明すると，(21)(22)(23)何れも賓語が場所を表している。その中で(21)(22)は着点，(23)は存在点という差異が存在する。また(24)は動作の間接対象（(24)では“我给你一本书”の“一本书”のような直接賓語の存在が想定される）となる。

〔3〕 SはOだ

このグループには，Vにおいて主に“是”が用いられる。この点は英語のbe動詞に相当する部分となる。

(25)　*我*是日本人。（*わたしは*日本人**です**）《平山 2012》

(26)　*这*是我的书。（*これは*私の本**です**）《平山 2017a》

以上，上に挙げた〔1〕から〔3〕は日本人が第一外国語として学んだSVOの知識から十分に認識が可能となる。

### 3.2　主語の基本的枠組の設定

中国語の基本語順設定において，主語の範囲や設定という点についても避けて通ることができない。中国語の統語分析において採用されている階層分析（“层次分析”）では，主語とは主述フレーズ（主語＋述語）という

枠組の中で用いられる。また，中国語の主語は話題（topic）としての色彩を多分に含む。この点は中国語の主語が「陳述・説明の対象」（朱德熙 1982：17；北京大学中文系现代汉语教研室编 2004：307；輿水・島田 2009：21；三宅 2012：81 等）という定義からも垣間見ることができる。主語の定義をかくの如く設定した場合，そこには動作者以外のものも見られる（(27)(28)(29)は朱德熙：99-100 より引用）。

(27)　*那幢房子*早就拆掉了。（*あの部屋は*とっくに取り壊されました）⇒主語が受動者

(28)　*这枝笔*不能写小字。（*このペンでは*細字を書くことができません）⇒主語が道具

(29)　*这位同学*我没跟他说过话。（この同級生と私は話をしたことがありません）⇒主語が参与者

中国語が話題優先型の言語の一種であることは，中国語文法理論研究における基本的な定説として受け入れられている（刘丹青 2012a：299）。その影響力の高さについては，様々な論及が成される。昨今の研究だけを取り上げてみても，関連する文献は度々目にすることができる。例えば刘丹青（2012a）においては言語目録類型論（“**语言**库藏类型学”）の立場から，中国語の“显赫范畴”（ある言語において高い際立ちと優勢を誇る範疇[8]）の典型例の一つとして話題構造の存在が指摘されている。更に，刘丹青（2012b）では話題構造の拡張という点から中国語比較文の特徴について論証を行っている。また話題を統語上の範疇として論じるものも見ることができる。张伯江（2018）においては主述述語文（“这几个生产队的耕地好坏差不多”（この幾つかの生産チームの耕地は良し悪しが同じくらいだ）），遍遍性主語文（“酒和烟他一样也不沾边”（酒とタバコを彼は同じよ

（8）　刘丹青（2012a：292）から原文を引用しておく。“所谓显赫范畴，简单地说是一种语言中既凸显，又强势的范畴”。更に細かい定義は紙幅の都合上省略する。詳しくは同論文を参照されたい。

うにたしなまない)），名詞状語文（“咱们电话联系吧”（私達は電話で連絡しましょう））等をテーマとして中国語の多くの文は話題構造であり，文頭の成分は必ずしも VO と意味役割を有する成分でない点が指摘されている。沈家煊（2012b）においては，“零句”（miner sentence）と複数の“零句”によって構成される“流水句”（flowing sentence）には主語が存在せずに自然な文として成り立つ例の多数存在することが指摘されている。沈家煊（2017）では更に，中国においては欧米言語によって定義される主述フレーズが存在しないことを主張している。更には（陆丙甫 2009：14）では文法成分関連の用語に対する理解のない一般話者も文を理解できる状況を鑑み，主語等の概念が言語研究における必須事項かも検討に値する内容であることに言及している。

以上に示した観点は，世界の言語という巨視的枠組から中国語を捉えるという目的においては有益な手法である。更には欧米言語との特徴の違いを捉える，欧米言語の枠組みや呪縛から脱して中国語独自の文法範疇を構築する（沈家煊 2012b：414，2017：12；张伯江 2018：241）という点を趣旨とするならば，強調されて然りと言える。外国語話者の言語背景を生かした理解の仕方は，沈家煊（2012b：414）“这好比国外的中餐馆，为了迎合西方人的口味，做的饭菜已经不是地道的中餐”（これは海外の中国料理店が西洋の人々の味付けに合わせるようなもので，作られた料理は既に本場の中国料理でなくなっている）で指摘される通り負の側面と捉えられることは容易に察しがつく。しかし一方で，日本人話者の立場から外国語を捉える上では，「日本人の味付けに合わせる」という側面を考慮するのも有益な材料となり得る。当然主語という概念自体も一方的に否定する必要もないだろう。

また統語論的要素に目を向ける場合，中国語の文においても，日本語，英語同様主語には動作者や属性の主体が用いられる。

(30)　这个很好。（これは / 良い）

(31)　*我*喝红茶。(私は / 紅茶を飲みます)

(32)　*我*是日本人。(私は / 日本人です)

先にも言及したが中国語の主語は動作者のみならず，多種の意味役割が存在する。そして動作者以外の成分が主語となる文について，動作者を主語とする SVO 語順からの拡張形式であることは先行研究でも指摘されている（袁毓林 1996；石毓智 2001)。また，形態変化を有さない中国語において主語 S と賓語 O（或いは動作者と受動者）が動詞 V で隔てること，即ち意味役割が動詞の左右に隔てられることでその意味関係が明確にされやすいという点に対する指摘も見られる（施春宏 2004)。刘丹青（2016、2018）においては，ある一定の枠組みにおいては主語の存在が認定されることを主張している。更には主語の典型は動作者であることが主張されている。中国語の主語の特徴について，Chao Yuen Ren 著，吕叔湘译（1979：45）の「中国語の主語において動作者（受動的な動作，“是”を含めて）となるのは 50％に到達しない位だ」という言及が見られる。この指摘は，先行研究の中でも話題優先型の論拠の一つとして引用されている（沈家煊 2017：2；谢思炜 2018：14)。但し上述のデータはあくまで，中国語の主語における動作者という要素が他の言語と比べて相対的に薄いという点を示したに過ぎない。中国語内部に目を向けてみると，主語の中で動作者の用いられるパーセンテージが一番高いことを覆す証左にはなっていない。

更には動作者主語と対照してみる時，これからが主語としての有標性を有していることは節々から読み取ることができる（以下の（33）から（34）は朱德熙（1982：96）から引用，（35）から（36）は李临定（1984：12）から引用)。

(33)

a．*我们*昨天开了一个会。(私達は昨日会議を一つ開きました)
⇒動作者主語

b．*昨天*我们开了一个会。（昨日私達は会議を一つ開きました）⇒時間主語[9]

中国語において動作発生の時間を表す（日本語の「いついつに」に当たる）成分は動詞の前に若しくは文頭に置かれることは文法書や教科書等でも目にする説明内容である。一方，疑問文を作る際には制約において差を見ることができる。

a′．*你们*什么时候开会。（君達はいつ会議を開きますか）

b′．？*什么时候*你们开会。（いつ君達は会議を開きますか）

以上，主語に時間を尋ねる疑問代詞“什么时候”に変えた場合容認度が低下する。

（34）

a．*弟弟*已经吃了苹果了。（弟はもうりんごを食べてしまいました）⇒動作者主語

b．*苹果*弟弟已经吃了。（りんごは弟がもう食べてしまいました）⇒受動者主語

受動者が主語の位置で用いられるか賓語の位置で用いられるかはその特定性と不特定性（上掲の例では“一个苹果”か“这个苹果”等）によって相性の良しあしと関わるのはよく指摘されることである。更には，他の部分でも制約を見ることができる。例えば，李临定（1984：12）から次の例を見られたい。

（35）

a．*他*打了我一拳。（彼は私をがつんと殴りました）

b．？*我*他打了一拳。

（36）

---

（9） 4.3 で論じることになるが，本稿では連用修飾語の一種として分類している。（33b）については朱德熙（1982）の主張に合わせ，便宜的に「時間主語」として表現する。

a．*老张*看着老李。（張さんは李さんを見ています）

b．？*老李*老张看着。

(35)(36)の例について動詞の前に並べられた両者は方梅（1995：285）の表現を借りれば「受動者性の強弱が同等の組み合わせ」となる。方梅（1995）の指摘によれば，文頭の成分が受動者と解釈される傾向性が強いとある[10]。文としてある程度容認される要素も見受けられる一方，李临定（1984）の如く成立を危ぶむ指摘も見られる。動作者ほど融通性の高くない点が伺える。

(37)

a．我用这支笔写小楷。（私はこのペンで細字の楷書を書きます）⇒動作者主語

b．这支笔我用来写小楷。（このペンで私は細字の楷書を書きます）⇒道具主語

(38)

a．我给小王写了一封信。（私は王さんに手紙を一通書きました）⇒動作者主語

b．小王我也给他写了一封信。（王さんにも，私は手紙を一通書きました）⇒関与者主語

(37)(38)においても，道具や関与者をただ文頭に置くのみという作業が行われているわけではない。(37b)における“用来”と手段・方式を表す“来”の付加，(38b)における“给他”による照応等，統語形式も意味役割を判断する上での指標として働いている。

以上，簡単ではあるが主語の性格について概観し，動作者という意味役割が主軸となる点を確認した。以下の議論も，SVO の主語を動作者（心

(10)　方梅（1995：285）からの例を引用しておく。你我接管了（あなたを私が接収管理することにします）

理動作や属性の主体を含む）という点をベースに展開したい。

### 3.3　各フレーズ間の階層関係

SVO を核心と枠組みを考えるに際し，本章では階層分析について触れておきたい。中国語は形態変化を有さない言語である。欧米言語の如くフレーズと文が構成関係となる関係性にあるわけではない。中国語の文は一番大きなフレーズとなる。中国語のフレーズは，次の 6 種類に分類される（各種フレーズの名称は輿水・島田（2009：21-30）より引用[11]）。

（一）　主述フレーズ：前後両者が「主語＋述語」の組み合わせとなる。主語は，述語の「陳述・説明」の対象という関係性を持つ。

(39)　他 / 写了一首诗（彼は / 詩を 1 本書きました）

(40)　我 / 有事（私は / 用事がある）

(41)　外头 / 冷（外は / 寒い）

(42)　今天 / 星期三（今日は / 水曜日です）

（二）　修飾フレーズ：両者には「修飾語＋被修飾語」の関係を持つ。修飾語は，(43)(44)の如く名詞性語句を修飾する「連体修飾語」と，(45)(46)の如く動詞性語句を修飾する「連用修飾語」に分かれる。

(43)　新 / 作品（新 / 作品）；木头 / 房子（木造の / 家）

(44)　农场的 / 马（農場の / 馬）；我 / 哥哥（私の / 兄）

(45)　赶快 / 走（早く / 行く）；细细 / 研究（事細かに / 研究する）

(46)　非常 / 高（非常に / 高い）；有点儿 / 贵（少し / ［値段が］高い）

（三）　動賓フレーズ：前後両者の成分は「動詞＋賓語」という組み合わ

---

(11)　当該部分の用語として他に「- 連語」「- 構造」も使用される。輿水・島田（2009）では「- 連語」が使用されているが，本稿では「- フレーズ」で統一する。

せを成す。

(47) 洗 / 衣服（服を / 洗う→洗濯する）；修 / 电灯（電灯を / 修理する）

(48) 写 / 信（手紙を / 書く）；挖 / 坑（穴を / 掘る）

(49) 去 / 图书馆（図書館に / 行く）；坐 / 地上（地面に / 座る）；站 / 门外（ドアの外に / 立つ）

（四） 補足フレーズ：両者が「動詞 / 形容詞 + 補語」の関係にあり，補足関係を成す。

(50) 洗 / 干净（きれいに / 洗う）；说 / 清楚（はっきり / 言う）

(51) 做 / 完（食べ / 終える）；听 / 懂（聞いて / 理解する）

(52) 进 / 来（入ってくる）；坐 / 下（座る）；走 / 出去（歩いて / 出て行く）；买 / 回来（買って / 帰ってくる）

(53) 洗得 / 干净（きれいに洗える）；洗 / 不干净（食べきれない）

（五） 並列フレーズ：両者が同一の品詞成分で結ばれ，前後対等の関係を成す。

(54) 春夏秋冬（春夏秋冬）；多快好省（多く速く立派に無駄なく）

(55) 飞机，火车，轮船（飛行機，列車，汽船）；干净，利落（きれいで，きちんとしている）

(56) 黄河和长江（黄河と長江）

(57) 又干净，又利落（きれいな上きちんとしている）

（六） 連動フレーズ：2 つ以上の述詞成分を連用し，前後に並んだ両者に「主述」「修飾」「動賓」「補足」「並列」「連動」何れの関係も生じないもの。

(58) 借一本书 / 看〔本を一冊借りて / 読む〕

(59)　找人 / 聊天儿〔人を訪ねて / 雑談する〕

(60)　借辆车 / 运货〔車を借りて / 荷物を運ぶ〕

(61)　去北京 / 开会〔北京に行って / 会に出る〕

(62)　开着窗户 / 睡觉〔窓を開けて / 寝る〕

(63)　花钱 / 买回来 / 搁着 / 不用〔お金を使って / 買って帰り / 放っておいて / 使わない〕

以上 6 種のフレーズを挙げてみた。中国語では主述フレーズもこれらの一種となる。何れも前後にポーズやイントネーションを伴うことで，文となり得る。文が SVO の形式を必ず備えなければならないという制約も少なくなる。更には，主述フレーズ自体も文の大枠ではなく細部で用いられる例もありふれて目にすることができる。更には文法書でも解説を見ることができる（以下の例(64)から(66)は守屋（1995：130）より引用）。

(64)　〔**李老师病了** / 是真的〕吗？〔李先生が病気になったのは本当ですか〕⇒主述フレーズが主述フレーズの「主語」

(65)　我不〔知道 / **他是个哪个公司的**〕。〔あの人がどこの会社の人か知りません〕⇒主述フレーズが動賓フレーズの「賓語」

(66)　这是〔**我天天锻炼**的 / 结果〕。〔これはわたしが毎日トレーニングをつんだ結果です〕⇒連体修飾フレーズにおける連体修飾語

但しその一方で文の核心をなす上で「動作者―動作―受動者 / 対象」というのは認知上の基本モデルとなる（沈家煊 2006：35）。また，中国語の主語においても動作者の比率が一番高いであろうことは既に言及した。当然，基礎として動作者が主語となる SVO の構文スキーマの存在は見過ごしてよいわけではない。それが外国人の立場で中国語語順体系を捉えるとなると猶更である。中国語における動詞の地位という点に関して，動詞も名詞の一部と考える“名动包含”（沈家煊 2009，2012a）に示される如く名詞に比べ影響力の小さな側面を見出すことができる。しかし，その一方で，発話，文構造，フレーズ等多方面において英語と比べ動詞型言語と見

なせるような側面も存在する（刘丹青 2010[12]）。この点基本語順を考える際，動詞を中心とした意味役割を考察に入れることは不可欠ということが分かる。言語分析という点では，核心構造から派生形式へのリンク関係という点を明瞭，且つ可視的に体系化した提示をなすことで大きく有用性を増すことだろう。核心という部分に関心を寄せる現在の言語研究の流れにある（陆丙甫（2008b））という点を考慮に入れても，その重要性は言うまでもない。よって SVO 基本語順と階層分析を融合した整理という部分も一考の価値があるのではないだろうか。

SVO 語順を中心に，他の語順成分が如何なるルールで配列されているかという部分の考察は先行研究にも見ることができる（陆丙甫 2008a；张国宪，鲁健 2013）。特に陆丙甫（2008a：246）においては詳細な分析が見られる。同論文から例を挙げておきたい。

(67)　（他）［上星期［在实验室［用计算机［连续地［［工作了］］］］六天］］。（彼は先週実験室においてコンピューターで続けて 6 日間働きました）

上掲の例で説明すると，基礎となる V（工作了）を基層として，連用修飾語として外層から内層へ“时位（時間的位置：上星期），时量（時間

---

(12)　刘丹青（2010）から幾つか例を挙げておきたい。何れも，英語の方が名詞の占める役割が高く，中国語では動詞の役割が高いことを示す例として示されている。

①　Eat some fruit, please. — I've eaten/ate *（some）～　吃点水果吧。— 我吃过了。

②　trains from Shanghai .　～　从上海 *（来）的火车。

例文①の返答部分において，英語では賓語の後の名詞（“some”）が省略できない。一方中国語の方では相対する名詞性成分の必要とされない点が指摘されている。②では，英語では前置詞の前に動詞の使用が必要とならないが，中国では介詞フレーズ（“从上海”）の後に動詞（“来”）がなければ非文となることが指摘されている。

量：六天），处所（場所：在实验室），工具（道具：用计算机），方式（方式：连续地）”という順序で統語位置の段階性を表すとある。

以上の如く，主に連用修飾成分各種（動作発生の時間点，手段・方式，場所）の作用について詳細な分析が成されている。更には，各種語順成分を同一平面上に並べることで，語順ルールの明瞭化を果たしていると言える。但し，次の点において断片的な感が否めない。

（1） 連用修飾成分に関する分析が綿密な一方で，他の成分（時量補語以外の各種補語，連動フレーズ等）について言及が成されていない。

（2） 各種文成分を同一平面上に配列することで，各種成分の異なる次元から施される肉付け関係が見出しづらくなっている。

これらの点を考えると，大枠から細部までの俯瞰図を構成することができれば，本研究の目的とするSVOを基準とした肉付け関係を整理する上での重要な第一歩となることが予想される。

話をフレーズに戻したい。SVO語順を上の6種フレーズに当てはめて言えば，SVOという主述フレーズにおいて，述語部分にVOという動賓フレーズの使用された形式となる。同時に，中国語の複雑な形式は述語部分におけるVOの肉付けされた形式と見ることができる。

ここで，構造部分の肉付けという点については，陆俭明（1993：227）の拡張（expansion）という概念を指標としておきたい。拡張について，同論文では直接構成成分の連続した同一線上に並べられたタイプに“更迭性扩展”（expansion by the supersession），“组合性扩展”（expansion through the Combination）が提示されている。

“更迭性扩展”は“模型里的某个序列被一个包含这个序列但长度超过该序列的新的序列所替代，从而构成一个长度超过原模型的新的扩展式”（原型におけるある序列成分がそれを含むが当該の序列成分を超えた長さの新しい序列成分にとって代わられ，原型を超える長さの新たな拡張形式を構

成すること）と定義されている。以下陆俭明（1993：227）から用例を挙げておく。

（68） 买房子（家を買う） →動賓フレーズ

⇒买〔一所房子〕（家を一軒買う） →動賓フレーズ

（69） 他去（彼は行く） →主述フレーズ

⇒他〔去北京〕（彼は北京に行く） →主述フレーズ

例えば，上掲の例では動賓フレーズ（それぞれ“买房子”“他去”）の中の一部（“房子”“去”）に拡張の操作が行われているが，全体の大枠は拡張前のフレーズ関係（それぞれ動賓フレーズと主述フレーズ）という点で変わりがない。本稿で採用の肉付けという表現を用いるならば，あるフレーズ内部における肉付け関係に相当する。

“组合性扩展”については“以模型作为一个整体跟另一个词的序列进行组合，从而构成一个长度超过原模型的扩展式”（ある原型を大枠とし，他の序列の単語と結合を行い，原型を超える長さの拡張形式を構成すること）と定義されている。同様に，陆俭明（1993：227）から用例を挙げておく。

（70） 批判（批判する） →動詞

⇒批判〔康德学说〕（カントの学説を批判する） →動賓フレーズ

（71） 洗（洗う） →動詞

⇒洗〔干净〕（きれいに洗う） →補足フレーズ

一方で“组合性扩展”は他の成分と結合することで，新たなフレーズを構成することになる。例えば，上掲の例では動詞（それぞれ“批判”“洗”）が挙げられた中で，他の成分（“康德学说”“干净”）を付加することで，新たなフレーズを構成している。言わば，拡張前の原型はフレーズにおける構成要素となる。こちらは，本稿「肉付け」という表現を用いるなら

ば，あるフレーズに対する外部からの肉付けに相当する[13]。

ここで各フレーズ間の肉付けの関係を上位から下位へと配列する場合次の通りになる。

◎大枠の語順

〔1〕 主述フレーズ

(72) 我 / 去中国。（私は中国に行きます）⇒述語が動賓フレーズ

(73) 我 / 也去中国。（私も中国に行きます）⇒述語が連用修飾フレーズ

(74) 我 / 听懂了。（私は聴いて理解しました）⇒述語が補足フレーズ

(75) 我 / 骑车去学校。（私は自転車で学校に行きます）《平山 2017a》⇒述語が連動フレーズ

文の中で主語の存在を設定する場合，基本的に全ての文が当該のフレーズに該当する。複雑な構造は述語部分における VO に様々な形で肉付けの施された形となる。

〔2〕 連用修飾フレーズ：VO に対する前方からの肉付け

当該のフレーズは，述語部分における最も大きな単位となる。被修飾語

---

(13) 拡張について，陆俭明（1993：227）では更に“插入性扩展”（expansion through the insertion）を設けている。このタイプの拡張は原型の間に単語を挿入し，原型の長さを超えた拡張形式を構成する。“更迭性扩展”“组合性扩展”と異なり，直接構成成分は連続性を持たない成分によって構成される。例えば“他所写的文章”（彼の書いた文章）における“他所写”は“他写”（彼が書く）という主述構造の中に“所”が挿入された“所”構造（“所”字结构）と分析している。このタイプは本文中で挙げたフレーズを基礎として展開するもので“更迭性”“组合性”の方がより基礎的肉付けの形式と言える。更には，先述の二者の拡張形式ほどありふれて見られるものではない。よって，本稿では考察の対象から外しておく。

の部分には，連動フレーズ，動賓フレーズ，動補フレーズが含まれる。

(76) 热烈 / 欢迎（熱烈に / 歓迎する）《輿水・島田 2009：138》⇒被修飾語が動詞

(77) 他们［在图书馆 / 学习汉语］。（*彼らは*図書館で中国語を勉強します）《平山 2012》⇒被修飾語が動賓フレーズ

(78) 我踢出的球［把体育馆的窗户 / 打坏］了。（私の蹴ったボールは体育館の窓を壊してしまいました）《平山 2017b》⇒被修飾語が補足フレーズ

(79) 攒了钱，［干脆 / 去国外旅行］吧。（貯金が貯まったら，思い切って / 海外旅行しに行きましょう）《平山 2017c》⇒被修飾語が連動フレーズ

〔3〕 連動フレーズ：VO に対する後方からの肉付け

当該の単位は，(79)にも示す通り，連用修飾フレーズよりも下位に属す。前後 2 つの成文として動賓フレーズ若しくは補足フレーズが用いられる。

(80) 我［骑车 / 去学校］。（私は自転車で学校に行きます）《平山 2017a》⇒動賓フレーズ＋動賓フレーズ

(81) 好像谁在叫我，我［停下脚步 / 看了一下］。（誰かが私を呼んだようなので，私は歩みを止めて / ちょっと見てみました）《平山 2017b 一部改》⇒動賓フレーズ＋動補フレーズ

〔4〕 動賓フレーズ：述語の基本構造

当該の単位は，述語の基本部位を表す。単純な形としては“VO”の形で示される。

(82) 我［喝 / 可乐］。（私はコーラを飲む］）

(83) 我［是 / 日本人］。（私は［日本人 / だ］）

(84)　我［有 / 电脑］。（私は［パソコンを / 持っている］）《平山 2017a》

〔5〕 補足フレーズ：VO 内部で展開された肉付け

当該のタイプは，動賓フレーズ内部の動詞部分に関する肉付けの施されたタイプとなる。肉付け後も動賓フレーズという枠組に変化が生じない。動賓フレーズの下位に属することとなる。

(85)　我［看 / 完］了。（私は読み終えました）

(86)　我［［听 / 错］了你的话］。（私はあなたの話を聞き間違えました）《平山 2012》

(87)　我昨天［［看 / 见］他］了。（私は昨日彼を見かけました《平山 2017a》

〔6〕 連体修飾フレーズ / 並列フレーズ：細部における肉付け

当該のタイプは，主語，述語，賓語と様々な階層において現れる。言わば，〔1〕から〔5〕の下位レベルに属す(14)。

(88)　这［是［我的 / 书］］。（これは私の本です）《平山 2017a》

(89)　［你的 / 衣服］很漂亮。（あなたの服はきれいだね）《平山 2017a》

(90)　［孙老师 / 和学生们］［又是学生 / 又是朋友］。〔孫先生と学生たちは師弟どうしであり，友人どうしでもある〕⇒主語

(91)　吃［水果 / 和蔬菜］。（果物と野菜を食べる）⇒賓語

連体修飾フレーズの一例としては(88)(89)では名詞性の“的”を用いた連体修飾フレーズを提示している。それぞれ，主語，賓語と異なる文成分として使用されている。(90)では主語の位置に接続詞“和”を用いた名詞

(14)　同様の考え方は，陆丙甫（2008a）にも見ることができる。同論文においては文成分を明瞭に示す為同一平面状から連体修飾フレーズを排除することを提案している。

の並列，述語部分においては副詞“又”を用いた連用修飾が並列されている。(91)では“和”を用いた名詞性語句の並列フレーズが賓語として用いられている。

## 4. 基本語順と各フレーズの階層関係

第3章でSVOの肉付け関係を示したが，以下具体的な文法事項に当てはめて提示していきたい。

### 4.1 SVOを中心とした基本語順

中国語の文において，述語の中心成分が動詞，形容詞，名詞かによって異なる名称の述語文となる。それぞれのタイプについて観察をしておきたい。

#### 4.1.1 動詞述語文

このタイプの述語文は，動詞が述語における構造的中心となる。その中で，最も単純なタイプはV若しくはVOが述語となったタイプである。

(92) *我们*休息。(私達は休憩します)

上掲の例に示す如く，動詞の中には賓語をとらない自動詞も存在するが，多くは賓語を伴うタイプのものとなる。基本となるSVOの意味関係については3.1で触れたので，本節では例を挙げるに留めておく。

(93) *我*喝冰咖啡。(私はアイスコーヒーを飲みます)《平山2012》

(94) *他*在房间里。(彼は部屋にいます)《平山2017a》

(95) *我*有电脑。(私はパソコンを持っています)《平山2017a》

(96) *我*是日本人。(わたしは日本人です)《平山2012》

上掲の例において動詞と賓語の意味関係は，(93)(95)は「OをVする」，(94)は「OにVする」，(96)は「Oである」タイプとなる。また，一部

「OがVする」タイプも存在する。この点についても 3.1 節で言及したので，例を挙げるに留めておく。

(97)　*我*很**喜欢**历史。（私は歴史が好きだ）

(98)　*那儿*有一家快餐店（あそこに一軒ファストフード店があります）《平山 2012》

### 4.1.2　形容詞述語文

中国語の形容詞述語文の単純な形は，形容詞がそのまま述語として用いられる。英語の如く be 動詞の仲介を必要としない。

(99)　*他*是很**认真**。（彼はまじめです）《平山 2017a》

(100)　*她*是很**漂亮**。（彼女はきれいです）《平山 2012》

但し，“是”は形容詞の前に必ず用いられないというわけではない。肯定を強調したい場合，以下のような例として用いられる。

(101)　这本书是好，你可以看看。（この本は紛れもなく良いので，読んでみたら良い）《现代汉语词典（第 7 版）：1197》

以上，形容詞述語文“SA”の形自体，“是”を用いた動詞述語文との一定の関連性を見ることができる。

### 4.1.3　名詞述語文

中国語の文において，主語と述語の両者が「時刻，曜日，日付，金額」等の特定の関係性表す場合おいては名詞句がそのまま述語として用いられる。

(102)　现在**是五点半**。（現在 5 時半です）《平山 2017a》

(103)　今天**是星期天**。（今日は日曜日です）

上の文では主語と述語の間に「だ」「である」という同格の関係が表される。“是”の省略と考えても，名詞が動詞の役割を担うと考えるにしても，当然“S 是 O”とのリンクと考えることができる。

### 4.2　SVO 全体に対する肉付け（語気助詞）

第 4 章の中で主述フレーズを大枠としてという点について言及したが，フレーズと文の違いという点まで考慮すればSVO の外枠に置かれるものとして語気助詞を挙げることができる。

(104)　*我*吃晚饭了。（私は夕食を食べました）《平山 2012》

(105)　*我们*回家吧。（私達は家に帰りましょう）《平山 2017a》

(106)　别大声说话，*婴儿*睡觉呢。（大声で話さないで。赤ちゃんが寝ているのです）《平山 2017a》

上掲の語気助詞“了”“吧”“呢[15]”はそれぞれ「状況の変化」「勧誘」「進行」と説明される。通常語気助詞は，階層分析の中で扱われることがない。第 3 章で形態的特徴から見る時「文は一番大きなフレーズ」という点についての言及を成した。一方で文は「フレーズの前後に一定のポーズやイントネーションを伴う」という特徴を有する。ポーズやイントネーションは話者の思考・心理・感情的側面を反映と見なすことができる。また「語気」自体も同様に心理・感情の反映体と見なすことができる。当該の形式は構造部分に対する肉付けと話者の主観性の付与されたタイプと言える[16]。

### 4.3　VO に対する前方からの肉付け

連用修飾という形は多くのパターンが存在する。副詞，介詞等個別の手

---

(15)　“呢”に機能に進行・持続を否定するものも存在する。例えば森（2000：269）では進行の意味を表すのは他の部分が担っており，“呢”自体は「動作や状態が進行中であるということを認めるムードを表す」と主張している。

(16)　主観性という部分がSVO 語順と関連性があるのか筆者としては，現時点結論を下せない状況にある。主観性と語順の関係について，完权（2017）の如く語順として特定の位置や傾向性もないという見解を示した先行研究も見られる。この点は今後の考察材料としたい。

段を取り上げてみても，意味的，機能的に見て千差万別の特徴を有する。この点に関して，本稿の主旨とする形式面の肉付けという関係から見出していきたい。

#### 4.3.1　語彙的手段による連用修飾

連用修飾語に関して，構造的に後続の述語成分に対する依存性の高いものと低いものが存在する。

##### 4.3.1.1　述語成分に対する依存性の高いタイプ

当該のタイプは後続成分の動作・状態の発生と共に付随的に認知される内容となる。一番代表的なタイプとし副詞を挙げることができる。

(107)　*这*个很**大**。（これは大きい）⇒程度

(108)　*我们*都**是**日本人。（私達はみんな日本人です）《平山 2017a》⇒範囲

(109)　*我*曾经**学过**汉语。（私はかつて中国語を学んだことがあります）《平山 2012》⇒時間

(110)　我不**吃**面包。（私はパンを食べません）《平山 2017a》⇒否定

上掲の例においては，それぞれ矢印の右側に示した如く異なる系列に属すが，何れも「S は～」「S は O を V する」という命題を軸に提供される情報となる。

次に，副詞以外の状況にも挙げておきたい。

(111)　*我们*这么**办**吧。（私達はこのようにしましょう）《平山 2017a》

(112)　*这件事*我又详细**说了**一遍。〔この件は私はまた一遍詳しく話した〕《三宅 2012：95》

(113)　*大家*痛痛快快**玩儿了**一天。〔皆はとても楽しく 1 日遊んだ〕《三宅 2012：95》

上掲の例においては，指示代名詞，二音節形容詞，形容詞の重ね型が連用修飾語として用いられた形となる。

#### 4.3.1.2　述語成分に対する依存性の低いタイプ

当該のタイプとしては，「いついつに」という動作発生の時点を表すパターンが挙げられる。

(114)　*他*明天回老家。（*彼は*明日実家**に戻ります**）《平山 2012》

(115)　*我*今天打扫房间。（*私は*今日部屋**を掃除します**）《平山 2012》

(116)　*我们*下午一点吃午饭。（*私達は*午後１時に昼食**を食べます**）《平山 2012》

上の例において“明天”（明日），“今天”（今日），“下午一点”（午後１時）はそれぞれ，“他回老家”（彼は帰省する），“我打扫房间”（私は掃除する），“我们吃午饭”（私達は昼食を食べる）という動作に対して「いついつに」という付加情報を与える成分となる。

一方で，“明天见！”（明日会いましょう）の如く上記の解釈しか成り立たない事例もあるが，多くの場面において主語としての性質を帯びたことが見て取れる。“回老家”“打扫房间”“吃午饭”は，“明天”“今天”“下午一点”という時点において何をするのか」という問いに対する回答としての役割も持つ。例文中における時間成分は“回老家”，“打扫房间”，“吃午饭”という動作の陳述や説明を受ける対象ともなる。言わば，時間詞（連用修飾語）は，後続する動作内容を認知する上での背景としての一面も有している。この点は，上の３例に関して「彼は，**明日は**帰省します」「私は，**今日は**部屋を掃除します」「私達は，**午後１時は**昼食を食べます」と時間を表す成分の後に「は」を付加できる点から見ても，理解しやすい点と言えよう。

また述詞性語句の前の時間詞を主語とする分析は先行研究にも見ることができる（以下(117)-(118)は朱德熙（1982：97）より引用）。

(117)

(a)　今天下午开会。（今日の午後会議があります）

(b)　今天下午开不开会？（今日の午後会議がありますか）

(118)

(a)　晩上会下雨。（夜雨が降るだろう）

(b)　晩上会不会下雨？（夜雨が降るだろうか）

朱德熙（1982：97）では主語の判定基準の一つとして反復疑問文にすることができるかという点が挙げられている（“你去”（あなたは行く）→“你去不去？”（あなたは行きますか）；“他抽烟”（彼はタバコをする）→“他抽不抽烟？”（彼はタバコを吸うだろうか））。上の例において時間名詞は，主語としての特徴が見られることが分かる。この点，4.3.1.1 で挙げたタイプの連用修飾語と異なる性格を呈することが分かる。

### 4.3.2　後置成分（構造助詞“地”）を媒介とした連用修飾

当該のタイプは構造助詞“地”を用いた“地”フレーズの形で主に動作の様態やプロセスを描写することとなる[17]。“地”フレーズには“地”の省略可能なものも見られる。

(119)　这件事*我*又详细（地）说了一遍。〔この件は私はまた一遍詳しく話した〕《三宅 2012：95》

(120)　大家痛痛快快（地）玩儿了一天。〔皆はとても楽しく 1 日遊んだ〕《三宅 2012：95》

(121)　*她的脸*渐渐（地）红了。〔この件は私はまた一遍詳しく話した〕《三宅 2012：95》

その一方で，本来連用修飾関係を表せない両者の間にも“地”を介することで，その幅が大きく広がる[18]。

---

(17)　例えば「彼は部屋を綺麗に掃除した」という日本語に対して，中国語では“他把房间打扫得干干净净”“他干干净净地打扫了房间。”等複数の表現で表すことができる。前者は主に動作語の状態がプロファイルされるのに対して，後者は動作プロセスがプロファイルされる（张黎 2017：202）。

(18)　但し「その幅が大きく広がる」というのは，“地”を介さずに修飾できるも

(122) *他*得意地说（→* 得意地说）：“我成功了！”〔彼は得意げに言った。「成功したぞ！」〕《三宅 2012：94》

(123) 科学地研究（→* 科学地研究）〔科学的に研究する〕《輿水・島田 2009：139》

(124) 安安静静地坐着（→* 安安静静地坐着）〔静かに座っている〕《輿水・島田 2009：139》

(125) 一动不动地停着（→* 一动不动地停着）〔じっと停まっている〕《輿水・島田 2009：139》

### 4.3.3 前置成分（介詞）を媒介した連用修飾

連用修飾語における付加成分の働きという部分に関して，4.3.2 で言及した“地”の作用については構造助詞という名称の通り，本来連用修飾関係を有さない両者にも繋がりを持たせる機能を持つ。「両者に繋がりを持たせる」という部分の機能に関しては，介詞も同じ機能を有することになる。本稿では，2 種のタイプに分けて整理しておきたい。

#### 4.3.3.1 被修飾語内部における肉付けを必要としないタイプ

当該のタイプは被修飾語内における肉付けを特に必要としない。よって述詞成分の形式についても特に大きな制約を受けない。

(126) *他们*在图书馆学习汉语。（彼らは図書館で中国語を勉強します）

(127) *小张*对历史感兴趣。（張さんは歴史に興味があります）

(128) *我先生*明天从纽约回来。（私の夫は明日ニューヨークから帰ってきます）《平山 2017a》

---

のは必ず“地”を加えても連用修飾語になるという意味ではない。例えば一音節形容詞は上述の連用修飾を構成できない（例．快说（速く話す）→* 快地说，北京大学中文系现代汉语教研室编 2004：339；三宅 2012：95）。“一音節形容詞+de”が修飾フレーズで用いられる場合連体修飾語となる（例．热的饮料（温かい読み物）。

(129)　公司离东京塔很远。（会社は東京タワーから遠いです）《平山 2012》

上掲の例において“图书馆”（図書館）が動作発生の地点，“历史”（歴史）が心理動作の対象，“纽约”（ニューヨーク）が動作の起点，“东京塔”（東京タワー）が遠近を図る基準点として，それぞれの修飾関係を認識させる上で介詞の存在が重要な役割を担う。上述の介詞の役割について，次の例を見ると更に認識し易いものとなる。

(130)　用肉包子打狗（肉まんで犬を叩く）《陆俭明 2005：160 一部改》

“肉包子”は通常食べ物に属すが，上掲の例においては道具を表す。

#### 4.3.3.2　被修飾語内部における肉付けを必要とするタイプ

本節で挙げたタイプは単に介詞フレーズが前方から肉付けするのみならず，動詞の後に補語等の他成分の付加が必要となる。当該タイプとして，まずは“把”構文と“被”構文を挙げておく。

(131)　我把今天的作业做完了。〔私は今日の宿題をやり終えた〕《三宅 2012：189》

(132)　我的车被警察拉走了。〔私の車はお巡りさんにレッカー移動されました〕《平山 2012》

上掲の“把”構文，“被”構文は何れも後続の述詞性語句は裸の動詞（それぞれ“做”“拉”）だけで終わらせることができない。往々にして何らかの成分（それぞれ“完了”“走了”）が付加される。何れも被修飾語部分における伝達の中心が動作の発生よりも，その動作によって如何なる結果や状態に達したかという点に置かれる[19]。

---

(19)　更に付加成分以外にも述語動詞との組み合わせも考慮する必要がある。例えば“了”を付加した場合の容認度も変化が見られる（①②は，それぞれ三宅 2012：187,189 より引用）。①ａ．小李被老王打了〔李さんは王さんに殴られた〕ｂ．？桌子被小李打了。〔テーブルは李さんにたたかれた〕→桌子被小李打了两下。〔テーブルは李さんにたたかれた〕②ａ．他把字擦了。〔彼は字を消した〕

次に“比”構文を見てみたい。

(133)　今年比去年冷。(今日は昨日より寒い)《平山 2012》

“比”構文において介詞フレーズの後は裸の形容詞を置くことができる。この場合形容詞は“比”の前後を比較したある尺度における差を表す。上掲の例で“冷”はその尺度を「寒さ」が担う。よって，その差が如何なる状態であるのか，どれ位の数値であるのか具体的な情報の付け加えることも少なくない。

(134)　今年比去年 更/还冷。(今日は昨日より更に寒い)

(135)　今年比去年冷一点儿。(今日は昨日より少し寒い)

(136)　今年比去年冷得多。(今日は昨日よりずっと寒い)[20]

## 5. おわりに

本稿では，既存の中国語文法の枠組みを生かしつつ日本人により適した形で，という考えの下語順体系に対する整理を試みた。

具体的な内容として，第 1 章では中国語の語順理解において骨子となる語順に対して如何なるプロセスから発展関係が生じるのか整理を行った上での議論が必要であること，更には（プロセス 1）について論じることを示した。第 2 章では，中国語の基本語順を SVO という点から議論を展開することを示した。第 3 章では，SVO における主語，賓語，そしてその肉付け関係の前提に対して先行研究の指摘を交えながら論を展開した。そして，賓語は「O を V する」「O に V する」型等を基礎とする点，そし

---

b．* 他把字写了。〔彼は字を書いた〕

(20)　更に幅広く解釈すれば，刘丹青（2002、2003）で提示される“框式介词”（周置詞，circumposition）の各種（“从…起”“跟…一起”“用…来”“对…来说”等）も含められるかもしれない。本稿では一旦考察の対象から外しておきたい。

て主語の基本形に動作者，属性の主体に置くこと，主述構造を基礎に置いた各フレーズ間の肉付け関係を示した。そして，第 4 章では紙幅の都合上，肉付け規則について次の点について考察を行った。基本語順 SVO と SVO に対する外部肉付けとして語気助詞があることを示した。更には述語部分における VO に対する外部肉付けとしての連用修飾フレーズについて整理を試みた。

冒頭の問題提起とも重複することになるが，これまでの語順分析においては骨子となる基本語順からの発展関係について，異なる要素によるものを合理的に棲み分けして提示したものは見受けられなかった。その点，本稿で示すプロセスの違いを明確に示し，それぞれのプロセスにおける内部構造，そして各プロセス間の発展過程を合理的に示すことは，日本人話者が中国語語順体系を的確に把握する上で寄与する部分も少なくないであろう。更には，SVO からの発展関係の記述という分析自体意外と充実しているといい難い。中国語語順を論じる時 SVO を基本語順とする認識が備わっていることは，先行研究の節々から読み取ることができる。一方で，管見の限り真正面から扱ったものとして陆丙甫（2008b）等ごく少数に限られている。第 2 章で詳細に観察したが，昨今の中国語研究において欧米言語の文法体系からの脱却と中国語独自の体系の確立を目指す流れが強いように思われる。その発想を出発点とする場合，英文法の基本体系である SVO という枠組から展開される議論も忌避されやすいことが伺い知れる。一方で，日本語話者としては，大多数が第一外国語として英語を学んだ背景を持つ。よって，SVO 枠組みを活用した形で，一本の筋の通った肉付け関係を整理し提示することが，日本人話者の中国語理解に対し有益に思われる。その意味で，寄与する部分は多いのではないだろうか。

当然の事ながら，残りのフレーズについても分析を行っていく必要がある。また，SVO に対する構造的肉付けというだけでは説明できない部分は存在する。例えば，第 4 章で基本文型 SVO という点に言及したが，以

下の形は基本語順と構造的肉付けだけで説明できる問題ではない。以下は存現文の例である。

(137)　*告示牌上*貼着一张广告。（掲示板に広告が１枚貼ってあります）《平山 2012》

(138)　*门口*来了一位客人。（玄関にお客さんが１人いらっしゃいました）

以上の構文は「場所＋動詞＋動作者」の語順が特徴の一つとなる。場所と動作者の関係が「既知情報／旧情報」と「未知情報／新情報」という関係性を見出すこともできるが，本稿で主眼とする SVO という基本語順からの肉付けという点では，関係性を見出すのに困難である。何故動作者が賓語の意味で用いられるのか各成分の語彙的意味（“告示牌”“贴”“广告”，“门口”“来”“客人”）だけでは判断がつきにくい[21]。

また文頭の成分が動作者を表す場合でも主語と整理すべきか検討を要する状況も見られる。例えば疑問詞を用いた任意表現（“谁都／也～”“什么都／也～”等）を取り上げておく。当該タイプの構文は日本語訳を見ても「誰でも」「何でも」と「は」が後続することはない。更に文の統語的特徴を見ても，主語らしくない特徴が見られる。動詞・形容詞の前の“都／也”が必要となることはよく知られたことである。その他に疑問詞の部分にアクセントが置かれる〔(例．’谁都了解这个情况（誰でもこの状況を知っている)〕，疑問詞の後に“是不是”を置き 4.3.1.2 で言及したような反復疑問文を構成できない〔(例．* 谁是不是都了解这个情况？〕（陆俭明

(21)　(137)(147)で挙げた存在を表すタイプ（存在文）に関しては，「場所＋動詞＋動作者」という語順が文成立に大きく関わっている点に対する指摘が見られる（潘文 2006：84；王建军 2003：13)。また存在を表す“有”構文からの繋がりから説明した指摘も目にすることができる（李临定 1984：14，任鹰 2000：117，平山：64)。更には後者の点からの解説は文法書等でも目にすることができる（相原等 2016：165；丸尾 2010：164)。(137)を例にとると当該例文は“告示牌上有一张广告”（掲示板に一冊の広告がある）という例をベースとして“贴着”は“有”の存在方式を表すものとなる。

1986：163-164）。更には関連副詞“就”は疑問詞の後に置くことができずに，前に置かれる（杉村 2007），等が挙げられる。“就”の位置という点について点について例を一つ挙げてない（(139）は杉村 2007b：291 より引用）。

（139）

（a）　你有错误，改了就好，再犯老毛病就*谁*也少不了你了。（あなたに間違いがあれば改めたら良い。またいつもの癖が出たとしても誰もあなたを欠くことはできませんよ）

（b）　* 你有错误，改了就好，再犯老毛病就*王主任*也少不了你了。

これらは第 1 章で挙げた（プロセス 2）（プロセス 3）のコンセプトも加味して考える必要があるだろう。本稿では，第一歩として（プロセス 1）の構造的肉付けについて整理と分析を試みた。更なる分析が必要であることは，言うまでもない。何れも解明すべき課題は少なくないが，以上の点は稿を改めて論じたい。

## 参考文献

（中国語）

北京大学中文系现代汉语教研室编（2004）《现代汉语（重排本）》，北京：商务印书馆。

Chao, Yuen Ren（1959）A Grammar of Spoken Chines. Berkeley an d．Los Angeles: University of California Press. 吕叔湘节译本《汉语口语语法》，商务印书馆（1979）

陈平（1994）试论汉语中三类句子成分与语义成分的配位原则《中国语文》第 3 期，161-168 页。

储泽祥，王艳（2016）汉语 OV 语序手段的指称化效用《世界汉语教学》，第 3 期，318-330 页。

范晓（2010）论句式意义《汉语学报》，第 3 期，2-13 页。

范晓（2013）论语序对句式的影响《汉语学报》，第 1 期，2-11 页。

范晓（2015）不及物动词构成的句干句式《汉语学报》，第 2 期，2-12 页。

范晓（2016）句式的几个问题 —— 基于语言习得的视角《海外华文教育》，第 6 期，

723-738 页。
方梅（1995）汉语对比焦点的句法表现手段《中国语文》第 4 期，723-738 页。
李临定（1984）施事、受事和句法分析《语文研究》第 4 期，8-17 页。
刘丹青（2002）汉语中的框式介词《当代语言学》第 4 期，241-253 页。
刘丹青（2003）《语序类型学与介词理论》，北京：商务印书馆。
刘丹青（2010）汉语是一种动词型语言——试说动词型语言和名词型语言的类型差异《世界汉语教学》第 1 期，3-17 页。
刘丹青（2011）语言库藏类型学构想《当代语言学》第 4 期，289-303 页。
刘丹青（2012a）汉语的若干显赫范畴：语言库藏类型学视角《世界汉语教学》第 3 期，291-305 页。
刘丹青（2012b）汉语差比句和话题结构的同构性：显赫范畴的扩张力一例《语言研究》第 4 期，1-12 页。
刘丹青（2016）汉语中的非话题主语《中国语文》第 4 期，259-275 页。
刘丹青（2018）制约话题结构的诸参项——谓语类型，判断类型及指称和角色《当代语言学》第 1 期，1-18 页。
刘月华 潘文娱 故韡（2001）《实用现代汉语语法（增订本）》，北京：商务印书馆。
陆丙甫（2005）语序优势的认知解释（上）：论可别度对语序的普遍影响《当代语言学》第 1 期，1-15 页。
陆丙甫（2008a）语序类型学理论与汉语句法研究《当代语言学理论和汉语语法研究》，北京：商务印书馆，241-256 页。
陆丙甫（2008b）直系成分分析法——论结构分析中确保成分完整性的问题《中国语文》第 2 期，129-139 页。
陆丙甫、蔡振光（2009）“组块”与语言结构难度《世界汉语教学》第 1 期，3-16 页。
陆丙甫（2011）重度—标志对应律——兼论功能动因的语用性落实和语法性落实《中国语文》第 4 期，291-299 页。
陆丙甫、罗彬彬（2018）形态与语序《语文研究》第 2 期，1-13 页。
陆俭明（1986）周遍主语句及其他《中国语文》第 3 期，161-167 页。
陆俭明（1993）关于“他所写的文章”的切分《陆俭明自选集》，河南：大象出版社，220-230。
陆俭明（2005）《现代汉语语法教程（第三版）》，北京：北京大学出版社。
陆俭明（2016）从语言信息结构视角重新认识“把”字句，《语言教学与研究》第 1 期，1-13 页。
陆俭明（2017）试议句法成分长度问题，《语言教学与研究》第 4 期，59-66 页。
吕叔湘（1986）主谓谓语句举例《中国语文》第 5 期，334-340 页。

孟琮 郑怀德 孟庆海 蔡文兰（1999）《汉语动词用法词典》，北京：商务印书馆。
潘文（2006）《现代汉语存现句的多维研究》，南京：南京师范大学出版社。
覃业位（2016）汉语诗歌中介宾状语“N＋NP”的后置及相关句法问题《语言教学与研究》第 1 期，67-76 页。
任鹰（2000）《现代汉语非受事宾语句研究》，北京：社会科学文献出版社。
杉村博文（2007a）基于汉外对比的教学语法，《汉语教学学刊》第 3 辑：163-174 页。
杉村博文（2007b）现代汉语疑问代词周遍性用法的语义解释，张黎 古川裕 下地早智子主编《日本现代汉语语法研究论文选》，北京：北京语言文化大学出版社，284-301 页。
邵敬敏，任芝锳，李家树，税昌锡，吴立红（2009）《汉语语法专题研究（增订本）》，北京：北京大学出版社。
沈家煊（1999）《不对称标记论》，南昌：江西教育出版社。
沈家煊（2002）如何处置“处置式”？——论把字句的主观性《中国语文》，第 5 期，387-410 页。
沈家煊（2006）转指和转喻，《认知与汉语语法研究》，北京：商务印书馆 30－52 页。
沈家煊（2009）我看汉语的词类《语言科学》，第 1 期，1-12 页。
沈家煊（2012a）“名动词”的反思：问题和对策《世界汉语教学》，第 1 期，3-17 页。
沈家煊（2012b）“零句”和“流水句”——为赵元任先生诞辰 120 周年而作《中国语文》，第 5 期，403-415 页。
沈家煊（2017）汉语有没有“主谓结构”《现代外语》，第 40 卷第 1 期，1-13 页。
施春宏（2004）汉语句式的标记度及基本语序问题《汉语学习》，第 2 期，10-18 页。
石毓智（2001）汉语的主语与话题之辨《语言研究》，第 2 期，82-91 页。
完权（2017）汉语（交互）主观性表达的句法位置，《汉语学习》第 3 期，3-12 页。
王建军（2003）《汉语存现句的历时研究》，天津：天津古籍出版社。
谢思炜（2018）诗歌话题句探论，《语文研究》第 2 期，14-19 页。
杨成凯（1997）“主主谓”句法范畴和话题概念的逻辑分析——汉语主宾语研究之一《中国语文》，第 4 期，251-259 页。
袁毓林（1996）话题化相关的语法过程《中国语文》，第 4 期，241-254 页。
袁毓林（2005）面向当代科技的语言研究的理论和方法《基于认知的汉语计算语言学研究》，北京：北京大学出版社。

张伯江（2018）汉语句法中的框—棂关系《当代语言学》，第 2 期，231-242 页。
张国宪、卢健（2013）从始点之视——汉语定语的时空视角走向，中国文法論叢刊行会編《木村英樹教授還暦記念　中国文法論叢》白帝社。
张黎（2017）《汉语意合语法学导论——汉语型语法范式的理论建构》，北京：北京语言大学出版社。
张谊生（2013）句法层面的语序与句子层面的语序——兼论一价谓词带宾语与副词状语表程度《语言研究》，第 3 期，40-51 页。
朱德熙（1982）《语法研究》，北京：商务印书馆。
中国社会科学院语言研究所词典编纂室编（2016）《现代汉语词典（第 7 版）》，北京：商务印书馆。

（日本語）
相原茂　石田知子　戸沼市子（2016）『Why? にこたえる　はじめての中国語の文法書〈新訂版〉』，東京：同学社。
平山邦彦（2008）「日本人学習者を対象とした中国語教育に関する一考察—その言語背景を考慮に入れて」『拓殖大学　語学研究』第 117 号，1-32 頁。
平山邦彦（2009）「存現文教学に関する一考察」『中国語教育』第 7 号，中国語教育学会，64-86 頁。
平山邦彦（2012）語順で覚えよう！　ワンフレーズ中国語『NHK ラジオテキスト　まいにち中国語』4-6 月号。
平山邦彦（2017a）『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 初級編』，東京：コスモピア。
平山邦彦（2017b）『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 中級編』，東京：コスモピア。
平山邦彦（2017c）「中国語語順体系に貫かれた構成原則について——基本語順の設定とその核心的 SVO の位置づけを中心に——」『拓殖大学　語学研究』第 137 号，57-100 頁。
輿水優 島田亜実（2009）『中国語 わかる文法』，東京：大修館書店。
丸尾誠（2010）『基礎から発展まで よく分かる中国語文法』，東京：アスク出版。
三宅登之（2012）『中級中国語 読みとく文法』，東京：白水社。
森宏子（2000）「平叙文における“呢”の機能」『中国語学』第 247 号，267-281 頁。
守屋宏則（1995）『やさしく くわしい 中国語文法の基礎』，東京：東方書店。
中邑光男・山岡憲史・柏野健次（2017）『ジーニアス総合英語』，東京：大修館書店。

北京・商務印書館 小学館共編（2016）『中日辞典（第 3 版）』，東京：小学館。
杉村博文（2005）否定情報の獲得と応用『中国語学』252 号，36-60 頁。

［付記］
本稿は平成 29 年度言語文化研究所研究助成による成果である。

（原稿受付　2018 年 11 月 29 日）